

玄関の間・座敷・庭

清水家の家内の片側は、主として客を接待するスペースとして利用されていました。正面の入り口を入ると、玄関、玄関の間、座敷があり、そこから庭へつながっています。

玄関の間：

加賀藩（金沢を中心とする封建時代の石川）の足輕（歩兵）宅では、玄関の間は、玄関につながる空間であり、そこで家人が客にあいさつして連絡を受け取っていました。このスペースでは、訪問者は家の内部に足を踏み入れる必要がなく、訪問を手短に切り上げることが習慣となっていました。現代日本においても玄関は家屋の基本的な部分であり、ここで隣人と会話したり、荷物を受け取ったりするのが通例とされています。

江戸時代(1603—1867)の加賀藩では、玄関から足輕の家屋に入る者は、その足輕と同等の階級の武士のみだったと言われています。上位の武士の場合、使者を派遣して玄関で口上を伝えてすぐに立ち去ったでしょう。商人、使用人、そのほかの下級階級の者は、勝手口を利用して用事を済ませていました。このような形で、客を接待することはしばしば、対等の位の者同士での気軽な社交行事であった見られています。

座敷：

ここが、足輕の家族構成員が客を接待する場所でした。晴れた日には、スライドドア（障子、ふすま）を開けて庭園の景色を楽しむことができました。雨の日でさえ、ベランダに張り出す軒先があり、風雨に晒されることなく、十分に屋外を楽しむことができたのです。

座布団の配置に見られるように、客は掛け軸、絵画、床の間からやや離れた場所に座っていたでしょう。ここには現在、菅原道真（845—903）が描かれている掛け軸が床の間に掛けられています。菅原道真は平安時代（794—1185）の高名な学者、詩人、政治家でしたが、初代加賀藩主の前田利家（1538—1599）は、自分が道真の子孫だと主張していたのです。

庭：

庭園は、隣家から区分するために四方を生垣で囲まれており、審美的にも美しい景観を作り出している。庭園は装飾的存在にとどまらず、野菜栽培や果樹育成にも利用されていました。自給自足の一環として、足輕の家庭では自分たちが育てた食物を食生活の足しにしていたのです。